

# ホセ・マルティの見た米墨関係：1887～1891

## Jose Martí's View on Mexico: 1887-1891

松枝 愛

MATSUEDA Megumi

東京外国語大学大学院博士後期課程  
Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Student

### 著者抄録

小論は、キューバで第二次独立戦争を指導したホセ＝フリアン・マルティのメキシコ観について、米国亡命中に執筆された記事を資料に、その後半期である1887年から1891年までを対象に分析する。第一節で、メキシコの近代化に期待したマルティの言論を確認する。第二節では、米国におけるメキシコ観のゆがみとしてマルティが指摘した文献とその表現、彼が懸念した南方外交に関わるB.ハリソン政権の政策を具体例に沿って挙げた。第三節では、米州国際会議と米州国際通貨会議の場で顕在化した米州諸国間の懸念にマルティがどう反応し、分析したかを明らかにする。そこから、ポルフィリオ・ディアス期のメキシコの堅実な外交姿勢に対する評価と不安が入り混じりつつも、キューバの独立運動のためにメキシコを必要としたマルティには、理想高い言説とは別の現実的な側面があったと論じる。また、米州国際会議後に発表された「我々のアメリカ」論考のマルティの主張は、その後行われた米州国際通貨会議の場でのマルティの公の言動と一致することを示し、同論考発表当時のマルティの問題意識を具体的事例から明らかにする。

### Summary

This paper analyses the view of Cuban Independence leader José Julián Martí on Mexico through his articles written in the United States during 1887 and 1891. Firstly, we confirm his expectation toward Mexico for its steady modernization in the era of Porfirio Díaz. In the second section, highlighting his interest and his pro and con on the publication about Mexico and putting close eye on his analysis of the politics of the President Benjamin Harrison, the apprehension for the U.S. expansionism and its ignorance be affirmed. In the third section of this paper defines how Martí reacted to the Mexican diplomacy in the International Conference of American States as well as International Currency Conference that both held in Washington D.C. and revealed that Martí had a complex feeling on Mexican diplomacy but chose to ask to Mexican president Díaz an assistance for his Cuban Independence War. Then lastly we argue that the assertion of his renowned speech “Nuestra América” firmly consist with his public language and behavior in the mentioned Currency Conference in 1891.

### キーワード

ホセ・マルティ メキシコ 19世紀 キューバ独立戦争

### Keywords

José Martí; Mexico; 19<sup>th</sup> Century; Cuban Independent War

原稿受理日：2023.2.9.

*Quadrante*, No.25 (2023), pp.199–221.

### 目次

はじめに

#### 1. メキシコへの期待

1-1. マルティのポルフィリオ・ディアス政権観

1-2. 揺れるマティーアス・ロメーロ観

#### 2. 米国のメキシコ観への憂慮

2-1. メキシコの描かれ方

2-2. B.ハリソン政権と銀運動への関心

#### 3. 国際会議に見るメキシコと米国

3-1. ワシントン米州国際会議

3-2. 米州国際通貨会議

結び

はじめに

キューバ第二次独立戦争を率いた詩人ホセ



＝フリアン・マルティ(José Julián Martí, 1853～1895年)は、米国亡命中に米州関係に関する著述を数多く残している。その中で最も分量も多く、内容も充実しているのはメキシコ関係のそれである。本稿では、19世紀に入り急速に近代化を遂げる米国が、イスパノアメリカをどのように扱い、勢力圏に引き込もうとしてきたか、他方、イスパノアメリカ諸国は、どのようにそれに対応していたかを、特にメキシコに着目して、マルティの目を通して明らかにすることを目的にする。筆者は先行研究の傾向を踏まえた上で、10年余りのマルティ米国滞在中のイスパノアメリカに関する言説の推移を継続的に追うことで、代表的論説「我らのアメリカ」の意図を具体例に基づいて浮かび上がらせることができるのではないかと考えた。そして、マルティのメキシコ観について、研究ノート「ホセ・マルティの見た米墨関係：1881～1886」(『クアドランテ』24号)で、クリーヴランド民主党政権第一期(1885～1889年)にいたる時期の米墨関係をめぐる論説を検証した。本稿はそれに続くベンジャミン・ハリソン共和党政権期(1889～1893年)の同じ主題の論説を扱う。

同研究ノートでは、マルティがメキシコの対米外交を手放しに評価する傾向が確認された。また、与野党が逆転した1884年の大統領選挙や、1886年のカッティング事件<sup>1</sup>を通じて、マルティの情勢分析では、歴史的経緯を重視することがわかった。翻ってマルティが問題視したのは、目先の利益と先入観にとらわれた印象をもってイスパノアメリカを扱おうとする米国の姿勢だった。特にメキシコについて米国に流布する情報は無理解であり、それに基づく侮蔑が見られ、米国は間違った対応をしていると、マルティは指摘している。このような分析に基

づくマルティの批判は、亡命後半期において、より先鋭化したことを本稿では確認するとともに、メキシコに抱くマルティの期待の変化にも着目する。さらに、マルティの記事は、その熱量にかなりのばらつきがあることも指摘する。熱意が漲る記事もあれば、報道ぶりを淡々と並べるにとどまる記事もある。そこから浮かび上がるのは、マルティにとっての言論空間は、時事的な出来事を題材にして彼が理想とする世界観を表現する場である一方、生活の糧を稼ぐために必要な仕事にすぎないという現実的な側面である。

本稿では、まず、マルティは、メキシコへの期待をポルフィリオ・ディアス期の近代化政策の順調な進捗状況に見出していたことを明らかにする。その上で、米国のメキシコ観をマルティが憂慮した理由が、メキシコに関する叙述に見られる偏見と、大資本家寄りの政治にあったことを確認する。そして最終的に、ベンジャミン・ハリソン政権下で開催された国際会議の場で繰り広げられた米国の強硬姿勢とそれに翻弄されるメキシコをめぐるマルティの言説を見ることで、マルティの不安と希望が混淆したメキシコ観がどのような事実に基づくものだったのかを探る。さらにディアス政権との距離を徐々に縮め、キューバ独立戦争への支援を視野に入れて米墨関係の動向を追いつけた様子を明らかにしたい。

## 1. メキシコへの期待

19世紀後半のメキシコは、ポルフィリオ・ディアス<sup>2</sup>政権の近代化政策が功を奏し、財政運営は黒字に転換、国際的にも評価されていた。マルティは、祖国キューバが足踏みをしている間にスペイン植民地体制からの脱却と独立国家

<sup>1</sup> 1886年6月22日にメキシコ当局によって米国人の記者A・K・カッティングが逮捕・収監されたことに端を発してエル・パソとエルバソ・デルノルテの国境地帯で住民同士の対立が起こった事件。米墨戦争再発が懸念されるほどの国際問題に発展した。

<sup>2</sup> José de la Cruz Porfirio Díaz Mori (1830～1915年)。

として近代化を果たしつつある姉妹国メキシコに、特別な思いを抱いていた。亡命下の青年時代の2年間(1875～1877年)をメキシコ市で家族と過ごした経験に裏付けられた愛着がそもそも根底にあるのだが、主に二つの信条的な理由が挙げられる。まず、「もう一つのアメリカ<sup>3</sup>」の中の大国で、米国と国境を接するメキシコの外交姿勢によって、米国の領土拡張主義からイスパノアメリカを守れるかどうかは左右される、とイスパノアメリカの統合思想的視野を持つマルティが考えていたこと。二つ目は、キューバ独立運動にメキシコ政府の支援をマルティが期待していた点である。

本節では、マルティがメキシコに抱いた期待に焦点を当てる。マルティにメキシコを去る決断をさせたポルフィリオ・ディアスであったが、次第に彼の政治手腕、国家運営をマルティが認め、さらにディアス政権の要人たちと関係を深めたことがディアスへの理解にもつながった。その関係性は同時に、マルティの政治活動、執筆活動を大いに支えるものであったこともみていく。最終的に、マルティがキューバ独立戦争の支援をディアス政権に求めるに至る過程を辿る。

### 1-1. マルティのポルフィリオ・ディアス政権観

マルティは、内紛を治め国家を近代化の軌道に乗せたポルフィリオ・ディアス政権下のメキシコに、イスパノアメリカの希望を重ねていた。マルティは、キューバ独立戦争への協力をディアスに仰ぐために、1894年にメキシコを訪問し、彼と面会している。ただしマルティは、ディアスを当初から肯定的に見ていたわけではなかった。

マルティは、イスパノアメリカに重大な危機を誘発するのは政治権力をめぐる寡頭勢力間

の争いだと認識していた。そのため、1876年に「〔レルド・デ・テハーダ大統領の〕再選反対と公正な選挙」をスローガンに掲げて政権奪取のためにディアスが起こした反乱を批判し、1877年1月にメキシコを去る決意をした。非合憲的な政治手法への反発は、グフスト・ルフィーノ・バルデス政権下のグアテマラとグスマン・ブランコ政権下のベネズエラからマルティが実質的に追放された経験からも確固たる信念となる(Padrón 2015: 68-73)。ではどのようにマルティのディアス観は変化していったのか。

マルティはメキシコに拠点を移した1875年に執筆活動を本格的に開始しているが、家族的な付き合いで生涯の親友となったマヌエル・メルカードなど自由主義派と交流を深め、紹介されて投稿を始めたのが、政権派のユニベルサル誌<sup>4</sup>だった。やがて、労働界系のソシアリスタ誌、1876年には政治専門の新聞フェデラリスタ紙にも寄稿を始める。

その間、メキシコの歴史や社会の仕組み、権力構造に精通したマルティは、政治改革と資本主義発展を目指すレルド政権寄りの立場を取った。ディアスの反乱でレルド派は国外脱出を余儀なくされ、ユニベルサル誌もこれに合わせて閉刊した。マルティがディアスを否定した経緯もそこにある。また、ディアスは決起後、一度ニューオリンズに亡命し、国境沿いのテキサス州ブラウンスビルで同志を募って軍隊を立て直し、国境を越えてタマウリパス州マタモロスから攻略活動を始めた。このため、国境をめぐる米墨の軋轢を利用して反墨分子を反乱のために取り込んだディアスを「忌まわしい革命家(Martí [1985] 2009(2): 279)」とマルティは捉えている。

しかしディアスは政権奪取後、ディアス派の軍とレルド派の進歩主義者たちの間の政治的

<sup>3</sup> Otra América、メキシコ以南の米州諸国を指すマルティの表現で、1870年代半ばのメキシコ滞在時から使い始めた。

<sup>4</sup> Revista Universal de Política, Literatura y Comercio.



和解を進め、レフォルマ<sup>5</sup>と復興、自由主義経済の路線を引き継いだ (Ponce 2001: XVIII)。マルティは、ディアスの野心的性格には否定的だったが、彼の功績を次第に認めていった。ディアスは政権を奪取した1877年から革命勃発で亡命に至る1911年までの34年間の支配のうち、30年間政権トップに居座り続けたが、初期のディアス第一期政権で旗印にした再選禁止の立場を維持し、1878年には大統領再選禁止を憲法改正案に盛り込んだ。そして1880～1884年の4年間は、腹心のマヌエル・ゴンサレス<sup>6</sup>に政権を譲っている。国内外で政治家としての信頼を獲得しつつ権力を維持し、1884年の政権復帰につなげたのである。しかし、ディアス第二期政権の船出は難航した。ゴンサレス政権下で政府は莫大な補助金を近代化政策に費やし財政は破綻寸前だったため、財政再建で莫大な債務を処理することが喫緊の課題となっていた。ディアスは自国の利益を最優先に、国内秩序回復と経済発展のために大胆な手法を取った。1885年7月時点でディアスの財政手腕を、マルティはデータと共に評価する。

「ディアスは議会で多数派を占めると見込んで、絶望的な状況に果敢に挑んだ。つまり、財政支出を減らし、ゴンサレス政権が軽率に許可してしまった補助金の支払いを停止し、年率6%の2,500万ペソの25年債に一元化した。そして複数の債務利子が年1%ずつ上昇しても3%を上限に固定金利となる最も低い借入に統一し、債務

額を約1億4,400万ペソに抑えた」(Martí 2003: 502)<sup>7</sup>。

着実に近代化を進めるディアスの手腕と国際的評判をマルティが一定程度受け入れているのが、この頃からのメキシコ政府の政策運営への評価に表れている。メキシコは1864年のフアレス復権後、マクシミリアーノ・メキシコ皇帝<sup>8</sup>の君主制を支持した欧州諸国と断交し、当該国への債務返済放棄を宣言した。君主制支持に名を連ねた英国は外交使節を引き揚げさせるなどしたために関係は冷え込み、かつてメキシコの寡頭勢力との強固な繋がりを土台に築かれた経済的特権を失っていった。しかし、ディアス政権は巧みな外交政策で、フアレス政権下に自由主義の理想を共有し急接近した米国と互惠条約の交渉を進めつつも、途絶えていた欧州諸国の外交・経済関係の再構築に乗り出した。債務返済を再び交渉のテーブルに乗せたい英国は、当時の米国では敵わない外交力を駆使してメキシコの権力層に影響力を浸透させていく (Riguzzi 1992: 365-391)。メキシコでの経済優位性を争う米英とメキシコの駆け引きをマルティは肯定的に記述する。ただしここでは、米国に対するメキシコの警戒の緩さが指摘される。

「ロイヤルティに基づいた英国の支援がメキシコにとって非常に重要で、実に債務額の3分の2が英国人から出ているにも拘らず、将来的な米国との摩擦を恐れ、債務返済交渉は干渉の余地を与えかねないと果

<sup>5</sup> 「改革」を意味し、1857年憲法と同時代に進められた法制度の整備を主に指す。メキシコが近代化に乗り出すための土台を整える目的だったが、自由派と王党派の分断がさらに進み、レフォルマ戦争に発展した。

<sup>6</sup> Manuel del Refugio González Flores (1833～1893年)。

<sup>7</sup> この先 [Martí 2003] からのマルティの記事の引用は、引用の後にページ数のみを示す。同じページからの引用が続く場合、最後の引用にのみページ数を付した。〔 〕内は、執筆者の補足的な説明である。

<sup>8</sup> マクシミリアーノ一世 (1832～1867年)。帝政を望むメキシコの王党派とフランスのナポレオン3世の支援のもと、1864年にメキシコ皇帝に即位した。改革的な治世に取り組んだが、1867年に自由派に捕まり、ベニート・フアレスの命により処刑された。

敢にメキシコは〔英国に〕訴えた。メキシコのこの良心的な行為を米国人は深謝すべきだが、メキシコは自らの置かれた危険に気づいていないし、驚いたことに、米国に用心するのをやめてしまった。見るからに丁重に振る舞う米国の動機がなんであれ、従順かつ純朴に応ずるのはやめるべきだ」(502)。

このように、ディアス政権が米国に追従的な態度を見せるや、すかさず指摘したマルティであったが、メキシコの外交駆け引きをある程度評価していた。友人マヌエル・メルカードへの1886年10月の手紙では、次のようにディアスを語っている。

「ロメーロ・ルビオとディアス将軍の宣言について私が語っていることは事実です。報道や私的な会話でも感じられますが、彼らの行動は的確で、そこには威厳と謙虚さがあります。ディアスの行動にはある種荒削りで明からさな獐犢さが見られますが、それはここでは問題とされていません」(Martí [1963-7]1975 (2) Vol.20: 98)。

これは8月6日付のラ・ナシオン紙<sup>9</sup>でマルティがカッティング事件を扱った際に触れた、ディアス大統領とマヌエル・ロメーロ＝ルビオ内相による宣言が米国内で好意的に受け止められたという内容を指している(686-7)。

ディアスは、妻カルメン・ロメーロ＝ルビオ<sup>10</sup>を教会の活動に参加させて教会勢力を取り込み、農民に自治的な権利を与えて農民組織の

反目を抑え、寡頭勢力の政治力を弱めつつ経済的利益は温存させるなど、国内の反対勢力を取り込む手腕にも長けていた。だが対外的に融和な態度を取り、国際的な認知を得た点もマルティの意識変化に繋がっていると見られる。ディアスはフアレス時代に途絶えたフランス、英国、ドイツ、ベルギーと外交関係を再開し、また移民、国境、債務返済不履行、先住民の越境など問題が山積する米国とも、主権を断固守りながら良好な関係を築き、既に1878年に米国政府はディアス政権を承認している(Escalante 2004=2013: 201)。

ディアスの近代化構想とその実現に重要な役割を果たしたのが、シエンティフィコス(科学主義者)と呼ばれる大統領の側近たちだ。マルティは親友マヌエル・メルカードを通じて彼らと知り合い、ディアス政権の政策への理解を深めた。同時にマルティの博学ぶりを認めた彼らが、その後の自由党(*El Partido Liberal*、以下EPL)誌への投稿を促したり、児童向け雑誌『黄金時代』へ支援したりするなどして、現在に残るマルティの業績を築く一助となった。

シエンティフィコスは、その名の通り、科学に基づいた方法で社会を分析し問題解決に繋げることを是としていた。「科学的政策」を概念化して適用させることで、メキシコを近代化に導き、経済的繁栄が得られると考えた。そのために重要なのが、「秩序と進歩」<sup>11</sup>であった。教育者フスト・シエラ、経済人ミゲルとパブロのマセード兄弟やホアキン・カサス、文人政治家のフランシスコ・ブルネスやロセンド・ピネーダといった、多い時でも十人程度に過ぎなかった少数精鋭のグループが大統領を支え、そ

<sup>9</sup> 1870年に当時の自由主義派の大統領バルトロメ・ミトレの指示で創刊されたアルゼンチンの有力紙。

<sup>10</sup> ディアスはマヌエル・ロメーロ＝ルビオの娘と結婚した。

<sup>11</sup> これはオーギュスト・コントの実証主義に基づいており、伯国旗にもこの言葉が描かれている。シエンティフィコスは実証主義者であった。

の活動分野は多岐にわたった<sup>12</sup>。

この中のパブロ・マセード<sup>13</sup>は、マルティより2歳年上の友人であった。元外務大臣のマリアノ・マセードを父に持ち、国立銀行の創設に尽力した人物として知られることになるマセードは、メキシコ市とニューヨークを行き来する際に、マルティとマヌエル・メルカードの間の書簡を届けることもあった。2人の書簡の中にも度々登場し、マルティが長年構想していた『黄金時代』の実現に向けて背中を押してくれたのがマセードであることが記されている。1886年2月26日付のメルカード宛のマルティの書簡では、「今、様々な考えが蘇っていて、まるで私は陽光で遊ぶ子供のようにわくわくしています。そうさせた犯人はパブロ・マセードです。マセードは思いつきで、米州人のためのものを書いてシリーズにしようと私に提案したのです。これは我が人生の目標でもあり、長年夢見たことです。祖国のために、今、或いは永遠に役に立つものを生み出せるかもしれない希望が再燃したのですから」と、マセードが発案した子供向けの出版企画にマルティは心を躍らせている。また同書簡には、生活費の捻出に苦心するマルティに、*EPL* 紙への寄稿をマセードが提案した経緯も書かれており、「米国の基本的な情報、出来事、流行について定期的かつ冷静に語る情報がメキシコには必須である」という信念を共有し、手を差し伸べてくれた友人について、「パブロ・マセードが僕の魂に火をつけてくれました」と締めくくっている (Martí [1963-7]1975 (2) Vol.20: 84-6)。*EPL* 紙はディアス第二期政権の発足間もない1885年

2月6日に創刊した有力な政府系メディアで<sup>14</sup>、後にマルティが米国のエル・アメリカ<sup>15</sup>誌への投稿に続いて「我らのアメリカ」論考を載せた媒体である。マルティはこの書簡から約2ヶ月半後の1886年5月15日から同誌への寄稿を始めている。

## 1-2. 揺れるマティーアス・ロメーロ観

もう一人、ディアス政権とマルティをつなぐ重要人物がいる。メキシコ政府代表としてワシントンに駐在していたマティーアス・ロメーロ＝アベンダーニョ (1837～1898年) である。ロメーロは、1859年から終生米墨外交に携わり、ブキャナン、リンカーン、グラントといった米国大統領たちとの交渉を担当するなど、米国の政財界に広い人脈を持つ、マルティにとっては「怪物の内臓<sup>16</sup>」を渡り歩くイSPANアメリカの先達にあたる。

ベニート・フアレス、ポルフィリオ・ディアスと同じく南部オアハカ州出身のロメーロは、法律を教えていたベニート・フアレスの下で学んだ後、1861～1868年まで米国に外交官として滞在した。当時、保守派と自由派の内戦が続く国際的信用を得られなかった祖国を米国に認めさせることが、メキシコ人外交官の使命だった。

帰国後は米国の財政運営に関する知見を生かし、フアレス政権で財務大臣としてメキシコの国立銀行創設や財政システム構築に貢献した。マルティがロメーロを知ったのもこの頃で、1875年4月15日、当時オアハカ州代表の下院議員を務めていたロメーロが、鉄道建設につ

<sup>12</sup> 各人はほとんど接点がなかったものの、実証主義を推進する立場から、彼らは1890年代に入って有力政治家マヌエル・ロメーロ＝ルビオを介して自由連合の設立に携わった (Escalante 2004=2013: 203-5)。マヌエル・ロメーロ＝ルビオはフアレスともレルドとも行動を共にした自由派の法律家、政治家であるが、このようにディアスは、欧米の制度と文化、技術を取り入れた近代化を構想するシエンティフィコスを政治的派閥にとられず、積極的に採用した。

<sup>13</sup> Pablo Macedo y González Saravia (1851～1919年)。

<sup>14</sup> セラーノによると、*EPL* 誌はディアス政権に最も近い政府系媒体であった (Serrano 2012: 143)。

<sup>15</sup> El América。

<sup>16</sup> マルティが米国にいる自分を表現した際の言葉。



いて発言した内容をマルティはエル・ユニベルサル誌に書いている (Franyutti 1993: 78)。

ロメーロは再び 1881 年にメキシコ全権代表としてワシントンに送られ、亡くなる 1898 年まで米墨外交の第一線にいた。マルティが米国で最初にロメーロに言及したのは、1883 年の年頭にアーサー米大統領が主催したレセプションでの姿である。この時マルティは、「ニューオリンズのすらりとした夫人 (ルクレシア・アレン) を連れているのは、疲れ知らずの勤労家で、政治のビーバー、あらゆることに慎重で、上品な外見とは裏腹に、昼夜蟻のように働き、象の体重に匹敵する仕事を積み重ねるディオゲネス<sup>17</sup>のごとき人物、ドン・マティーアス＝ロメーロである」と表現している (214)。

マルティは、ロメーロとグラント元大統領がメキシコ鉄道建設をめぐる懇意になり、その後も二人が二国間通商に影響力を持っていたために、ロメーロを「メキシコと米国の接近を時代の使命とした男」、「米国に身を捧げた人物」などと形容し、自国より米国を優先するのではと懸念していた (502)」。グラントをはじめ共和党の有力政治家を中心に権力者と繋がりのあったロメーロだが、マルケスによると、共和党の大物ジェームズ・ブレインのことは友人と認識していなかった (Marquéz 2019: 93)。その後、第一回米州国際会議以降、当時 37 歳だったマルティと 51 歳のロメーロは私信を交換し合う友人となり、通貨会議中の 1891 年 4 月には、ロメーロに招かれ、マルティはワシントンの公邸で会食している。その後、ロメーロがディアスに宛てた書簡にもマルティの名が言及されるなど、マルティはディアス政権の中枢を通じてディアスとつながっていった (Padrón 2015: 82)。

1894 年 8 月のディアスとの面会につながる道はこうして開かれていった。だがキューバ独立派がメキシコに支援を求めるのはこの時が初めてではなく、1880 年代に独立派がメキシコ政府に働きかけた際にも、マルティは関与している。

その発端は、キューバの第一次独立戦争が始まった翌年の 1869 年 4 月 5 日、時のメキシコ大統領ベニート・フアレスが、キューバ独立派に交戦団体としての地位を承認したことで、独立派のメキシコ沿岸での武器調達を可能にした過去に遡る。これを根拠に、キューバ独立戦争を指揮したアントニオ・マセオ將軍とマクシモ・ゴメス將軍は、キューバ独立運動へのディアス政権の公的承認と物資支援の要請を具体的に検討し始めた。1884 年 11 月にマセオ將軍はメキシコを訪問した。訪問中、マセオは二度ディアスへの面会を求め、ディアスの妻カルメン・ルビオから承諾の返事を受け取っていたものの、面会は叶わなかった。メキシコ政府の支援を得られないまま、1885 年初頭に独立派リーダーのアンヘル・マエストレ＝コラーレスがメキシコからキューバ島に向けて出航した際、メキシコ当局の介入で、航海は失敗に終わった (Padrón 2015: 78)。

この取り組みは不発だったが、マセオがメキシコに出向く前月、將軍 2 人はニューヨークでマルティと面会している。この会合では、両將軍が独立後のキューバの国家体制を軍政にすると主張したため、文民派のマルティと意見が食い違った。そのためマルティは 2 人と一旦距離を置いて、執筆活動に専念する数年間を送ることになるのだが<sup>18</sup>、マルティがメキシコの支援をめぐる起こった一部始終について考察したであろうことは想像に難くない。この一件は、

<sup>17</sup> 紀元前 5 世紀のギリシャの哲学者。

<sup>18</sup> 両將軍が元軍人であるディアスに支援を求めたことをマルティがどう評価したか、またディアス政権への両將軍の支援要請とマルティの決別の決断に関係性があるかは定かではなく、本稿では指摘するに留める。

キューバ独立運動とメキシコ情勢の緊密さをマルティに知らしめると共に、約10年後に自らディアスと面会する布石ともなったと考えられる。

## 2. 米国のメキシコ観への憂慮

本節では、米国でのメキシコをめぐる言論へのマルティの反応を分析する。メキシコでディアス第二期政権が中央集権的な体制で国内秩序を整え国際的評価を高めつつあった頃、1888年の米国の大統領選では再び与野党が入れ替わった。クリーヴランド続投を望んでいたマルティは、地元ニューヨークの政治腐敗がB. ハリソンの勝利につながったと嘆いた。マルティは、高い道德意識に根ざして自由の理念を実現させた独立時代の米国と、カネと権力におぼれ政治腐敗が深刻な「金ピカ時代」のそれとの落差に慨嘆していた。その一方で、イスパノアメリカについて、スペイン植民地時代から続く圧倒的な格差社会のような害悪を歴史的な負債として背負い、苦悩しつつ生きていると捉えていた(776)。米国の有力者たちが、相手国を十分に理解することなしに目先の利益や表面的な印象で物事を進めようとするのを、マルティは米州関係において特に憂慮している。そのため、米国が発する米墨国境以南の地域についての情報に非常に敏感であり、イスパノアメリカがどのように米国で表現されているかを紙誌で細かく解説し、無知や蔑みに対しては憤りを露わにする。米州諸国の中でも特にメキシコは取り上げられる頻度が高いこともあり、米国で語られるメキシコ観にマルティは注目した。米国の間違ったメキシコ観を正したいという思いをマルティは強く抱いていた。米国がメキシコをどう見るかは、つまりイスパノアメリカをどう見るかにつながる。

本節では、初めにメキシコに関する米国内の

情報に対してマルティがその無理解を糾弾する言説と、出版早々にマルティが翻訳を名乗り出た小説『ラモーナ』への共鳴ぶりを確認する。そしてB. ハリソン当選の経緯に象徴される政治腐敗を非難した、同大統領就任当初、および年次教書へのマルティの言及から、メキシコとの関係性に着目して彼の注目した政策とその言説を分析する。

### 2-1. メキシコの描かれ方

1887年1月8日のEPL紙に宛てたマルティの論考は、「ここ数日、[米]国内の新聞でメキシコのことをよく目にする」と、米墨間の互惠条約を米上院が批准延長したことについてのニュースに始まって、メキシコに関する新刊本3冊を紹介している。

新刊書のうち2冊、ルシアン・ビアーの『アステカ民族(*Los aztecas*)』と、『今日のメキシコ(*The Mexico of Today*)』<sup>19</sup>はそれぞれ「フランス語からの翻訳で、著者の知識と分別が賞賛に値する」、「概して描写的だが新鮮味に欠ける」と単調な紹介に留めている。だがデーヴィッド・A. ウェルズの『メキシコ研究(*A Study of Mexico*)』については、「自発的に邪推し、無知と偏見を晒している」と、著者の未熟なメキシコ観を延々と糾弾する。「肉付きの良い逞しい人種は、体が小さく歴史的に苦難を経験してきた人種に怒りを向けるが、その事実を何ら覆い隠すことはない。常に恰幅の良い人種の中に身を置き、説得し続けなければならない」と、ここでのマルティは、まるで米国からの言論発信の使命に駆られているかのように語気が強い。続けて、「メキシコを羨んでいるのか無知なのか、ここではメキシコを馬鹿にするきらいがある」と、米国を空想上の生物グリフォンに準える。「米国には、二つの要素がある。慇懃かつ獐猛に前足を上げて、その羽を北から南まで広げよう

<sup>19</sup> 著者名は記述されていない。



とする要素と、理性を必然的に働かせようとするものの、欲や悪意に左右されやすい正義の要素である」(775)。この表現はその半年前のカッティング事件<sup>20</sup>をめぐる、戦意を旗幟鮮明にしたテキサスの民衆を連邦レベルで抑えたが、影では政治的打算が渦巻いていた事実と重なる。そして、ウェルズの描写について、著者の表現はメキシコ史や文化的な背景知識に欠けると指摘しながら具体例を挙げて批判する。それとともに、メキシコの未開性という固定概念を強調するばかりで、そこに生きる人々を貶める内容だと扱き下ろし、このような本が賛辞される環境を変えなくてはならないと主張する。強者が弱者を蔑んで平然と抑圧する構造を、まず人種で示してから国家の関係性で表し、さらに経済的支配への懸念に繋げる。

マルティは、アルゼンチン経済を紙幣の流通で近代化させた英国資本と比較し、メキシコへの理解が浅い米国資本がメキシコの近代化に寄与しうるのはかと疑問視する。この批評はメキシコを表面的に見ることしかできない米国の内臓をえぐるような、熾烈な表現に溢れている(774-5)。

その後、1887年6月23日付の *EPL* 紙への寄稿記事「米国におけるメキシコ」の中でも、米国で出版されたメキシコ関連の書籍について、マーク・トウェインと『金ピカ時代』を共著で著したチャールズ・ドウドレー＝ワーナーのメキシコ滞在記をマルティは事細かく分析した上で、「表面的で気取っている」と痛烈に批判している(864-8)。しかしながら、このワーナーの滞在記に関連して、1889年2月にメキシコ

人の親友マヌエル・メルカードに宛てた手紙では、ワーナーと共にミチョアカン州<sup>21</sup>を回ったイラストレーターと話したという一件に触れ、ワーナーの旅を「羨ましい」と吐露している。また同書簡中、マルティは小説『ラモーナ』<sup>22</sup>の翻訳出版についても触れているが、1884年にヘレン・ハント・ジャクソンが発表し、一世を風靡したこの作品をマルティが翻訳したのは、メキシコの文化的背景がよく描かれている内容だからだと記し、その評価は一転して好意的である(Martí [1965-7] 1975(2) Vol.20: 137)。『ラモーナ』については、スペイン語版の序文でマルティは、「[当作品は] 我らのアメリカの国々でも真の復活を遂げうる」、「現実的でありながら、美しい。言葉が宝石のように光り輝く」と絶賛し、ハリエット・ビーチャー・ストウの『アンクル・トムの小屋』に匹敵するものだと評している(Hunt 1884=2021: 11-3)。

## 2-2. B. ハリソン政権と銀運動への関心

マルティは1884年の米大統領選挙同様に、1888年の選挙戦の経過もつぶさに追った。この大統領選では、再選をかけたグローバー・クリーヴランドがベンジャミン・ハリソンに敗れ<sup>23</sup>、共和党が返り咲いた。米国情勢を米国内部から発信して8年目を迎えていたこの頃のホセ・マルティは、党利よりも信条を貫き、高関税政策を非とするクリーヴランドに共感を抱いていた。それだけに B. ハリソンの勝利と共和党の復権にマルティは否定的だった。しかも、ニューヨーク州の政界の打算と腐敗が結果を左右しただけに、マルティの落胆は大きかつ

<sup>20</sup> 松枝 2022: 132-136。

<sup>21</sup> メキシコ中西部に位置し、死者の日の祭りで名高いパツクアロ湖を有する州。州都モレリア。

<sup>22</sup> 原題 *Ramona*。米墨戦争直後の南カリフォルニアを舞台に混血女性の生き様が情緒あふれる詩的な文章で綴られている。マルティの翻訳について、レタマールによると、エンリケ・ウレーニャは原作を凌ぐと評価した。(Hunt 2021: 340)。

<sup>23</sup> 大統領選挙の敗因はクリーヴランドの保護関税攻撃がひとつにある。クリーヴランドは、1887年の一般教書の全てを高関税への攻撃に費やした。「国民に対して重い負担を強要することは弁護の余地がない強奪であり、米国の公平と正義に対する裏切り行為であることは明らかである」と主張した。実際は具体的な措置はなかったため、クリーヴランドの提案はほぼ受け入れられず、関税率の微減に止まった。

たようだ。関税改革を争点に11月4日に行われた選挙では、再選を目指す自由貿易派のクリーヴランドが、保護関税を訴えたB. ハリソンを一般投票において僅差で負かした(48.6%対47.8%)。しかし、選挙人投票でB. ハリソンは233票対168票で上回った。勝敗を分けたのは、わずか1% 差でB. ハリソンが競り勝ったニューヨーク州だった。選挙人票36票のニューヨーク州をクリーヴランドがおさえていれば、当選必要数201票を上回る204票対197票で民主党が勝利したはずだった。マルティはニューヨークの民主党と共和党の間で交わされた、民主党の現職州知事デーヴィッド・ヒル<sup>24</sup>の再選と引き換えに大統領選ではB. ハリソンへの投票を約束する密約の存在に選挙戦当初から触れ(1049-52)、ニューヨークの状況をこう語る。

「ニューヨークには金を出す富豪がいて、票が売られる。ニューヨークには、ビール産業が支援するヒルがいる。ヒルは高潔なクリーヴランドによって大統領選への道を阻まれ、恨んでいた。ニューヨークにはタマニー協会<sup>25</sup>がある。彼らは利益にならない大統領の票を捨て、地元での権力拡大を決めた。年8万ペソ、5万ペソ、3万ペソ程度の閑職ならば撒ける」(1136)。

従来の共和党の手法同様に、野心家のヒルも猟官制度を温存させて票田を得て、再選に繋げる目論みだとマルティは説明した。そしてB. ハリソンの勝利に失意を隠さなかった。「ニュー

ヨーク州では民主党員らが州議会選挙で当選し、同党の大統領候補クリーヴランドは負けた。保護主義の弁護士ハリソンが勝ったのだ。ハリソンの背後では、跪くライバルに象牙色の目で澁んだ視線を向けるブレインが勝利した。金持ちの友が権力の座に就き、彼らの懐を肥やし続ける政治が始まる! 正当な富を脅かすわけでも打つ手のない不正義に楯突くわけでもない貧者たちの怒りを鎮める政治が進んでいたのに!」(1132)。

マルティがB. ハリソン政権発足にあたり米州関係において最も危惧したのは、国務長官に任命されたジェームズ・ブレインの采配だろう<sup>26</sup>。ブレインは就任半年後に控えた米州会議を取りまとめることになる。ブレインの暴走を阻止すべく奔走した共和党の大物政治家コンクリングももういない<sup>27</sup>。マルティのこの頃の言論には、1892年の大統領選挙の党指名を狙うブレイン、といった表現が目立つ。米州国際会議で米国の覇権主義が顕になり、「もう一つのアメリカ」であるイスパノアメリカ諸国が米国に追従するのではないか、あるいは追従させられるのではないかという懸念が増した。

1889年3月の政権交代を機に就任した第23代大統領B. ハリソンが任期中に挙げた主な功績は、いずれも1890年7月から10月にかけて成立したマッキンリー関税法、シャーマン銀購入法、シャーマン反トラスト法が挙げられるが、同時に南方外交が大きな展開を見せた時でもある。

地政的にも経済的にも、メキシコの台頭は、隣の米国情勢に左右された。特に1880年代

<sup>24</sup> David Hill Bennett (1843～1910年)。民主党の有力政治家。ニューヨーク州知事を二期(1885～1888年、1889～1892年)務め、その後1892～1897年まで同州の上院議員となった。

<sup>25</sup> タマニーホールはニューヨーク市にある民主党の拠点。

<sup>26</sup> 松枝 2022: 327。

<sup>27</sup> Roscoe Conkling. ニューヨーク出身の共和党大物政治家。長年上院・下院議員を務め、終生グラントを支持した。マルティは、絶大な権力を持ちながらも、知的で肩書きに固執しないコンクリングに古き米国の政治家像を重ね評価していた。1888年4月24日のコンクリング死亡翌日に寄せた追悼記事で、マルティは、コンクリングの政治家人生を詳細に振り返り、「類まれなる雄弁家、グラントの至高の行政官、ガーフィールド政権の分裂仕掛け人、ブレインの申し分ない敵、米国で最も高潔で文学的な演説者」と表現した(1038)。

後半から1890年代にかけて米国世論を二分した金銀複本位制の是非は、米州全体を議論に巻き込むこととなり、銀の主要産出国であるメキシコにとっては見過ごすことのできない問題であった。そのため、銀運動 (Free Silver Movement) への B. ハリソン政権の対応に、マルティも大いに注目していた。

銀運動とは、通貨不足解消を目指すグリーンバック運動<sup>28</sup>の意志を引き継いだ、南西部の銀生産者や農民を中心に展開された運動で、銀の貨幣価値を高めて通貨量を増やすことを目的とした。世界経済の中心にいた英国が1844年に金本位制を採用したのを契機に欧州が金本位制に一本化したことにより、欧州で行き場を失った銀が米国に還流してきた。グラント政権は1875年に正貨兌換復帰法<sup>29</sup>を採択し、一旦は金本位制が確立したが、グreshamの法則に沿って金が欧州に流出した。銀による貨幣の役割を海外取引に使用される「貿易ドル」に限定していた米国では、還流した大量の銀が「貿易ドル」の鑄造のために造幣局に持ち込まれた。銀が大量に流れ込んだため、米国は1876年に銀の自由鑄造を停止するに至る。だぶついた銀の価格は低下し、銀生産者が苦境に陥った。それを救うために、連邦政府に毎月一定額の銀購入を義務付けるブランド・アリソン法<sup>30</sup>が1878年に成立した。金本位制では貨幣流通量が需要に追いつかない状況にあった米国では、銀と金の複本位制が現実的だった<sup>31</sup>。しかしマルティは銀を「米国人が享受する三つの富の一つ」(636)と捉えていて、ブラン

ド・アリソン法に「なぜ国は毎月200万ドル分もの銀を金の価格で買い取るんだ？ 誰も銀貨なんて買おうとしないし、銀の価値しかないではないか」(620)と懐疑的だった。前政権ではクリーヴランド大統領が同法を再三問題視していたにも拘らず<sup>32</sup>、議会は法改正に及び腰だった(770-1)。1888年の選挙で上下院とも共和党が勝利して議会の振れが解消されていたことに加え、金本位制支持派は共和党に多かったため、いよいよ改正に舵が切られるかのようにみえた。

銀の国際的な動向をメキシコが注視した背景には、植民地時代から続く銀産業の存在がある。スペイン植民地時代の16世紀に起源を持つメキシコ銀貨<sup>33</sup>は、南米のポトシ銀山や国内の銀山から産出した銀をメキシコで鑄造して作られていた。その質の高さから、スペイン領フィリピンを通じて特に東アジアで国際貿易の主要通貨となっていた。19世紀を通じて、英国系の貿易会社を介して銀はメキシコ最大の輸出品だった。しかし、1870年代から銀価格は低下傾向にあり、その流れを食い止める唯一の方法は、銀需要の実質的な増加であった(Márquez 2019: 95-7)。

こうした背景から B. ハリソン政権の銀政策には注目が集まり、米州国際会議の会期中の1889年12月3日、B. ハリソン政権2年目の年次教書の銀に関する発言でハリソンが銀の政府買取り額の倍増を懸念すると、マルティはこれに同調的であった。

<sup>28</sup> グリーンバック運動とは、南北戦争の戦費調達のために1862年から米国政府が発行した合衆国紙幣グリーンバックの兌換回復に伴い引き起こされた通貨不足とデフレーションに対処するための運動。

<sup>29</sup> Resumption Act.

<sup>30</sup> Bland-Allison Act.

<sup>31</sup> 1860～1880年代の米国の貨幣制度の歴史に関して、詳しくは Friedman and Schwartz (2008: 58-84)、川浦 (2014: 62-65) を参照。

<sup>32</sup> 1885年と1886年の年次教書で銀貨の滞留、市場価格と公定価格の乖離を問題にした (Department of States 1887)。

<sup>33</sup> Real de ocho (英語名 piece of eight)。直径4cm、重さ27g、純度93%の鑄貨で、当時のスペイン・レアル硬貨の8倍の価値があったため、スペイン語で「レアル8枚分の硬貨」という意味の Real de ocho という通称がついた。



「教書で大統領は銀の行き過ぎた鑄造を望んでいないと言った。現状で月200万ペソ分鑄造しており、法律が許しても400万ペソ分の鑄造をしようとする財務長官などいるはずがない。兌換率安定のため、共通理解の上で金に即した銀の証書は出回っている。でも証書に代わる鑄造銀でさえ、行き場を失い財務省の地下に雑然と積み上がる一方だ。そうとはいえ、銀がだぶついているからといって、公定価格と市場価格が乖離する市場に銀が出回ったところで商売は成り立たない。銀の信用を保つ最善策は、鑄造量を抑えることだ。(中略)銀貨は必要だ。というのも世界的に金が不足しているからだ。銀産出国が関心を持つべきは、過度な鑄造を約束せず、公定価格も市場価格も固定することなく、価格の変動率が低調な銀の価値を維持することだ」(1345)。

このように銀鑄造に慎重な姿勢を見せつつ、主に北東部の大資本家の支持を受けた B. ハリソンは、選挙公約通り保護関税主義の立場を保持した。当時の米国は巨大資本が主要産業を牛耳り、ロビーイングが政治活動に浸透していた。さらに、世界市場が拡大する中で国内産業を保護し大企業を優遇する保護関税主義か、はたまた市場に委ねる自由貿易主義かで意見が割れていた。このため、北東部の資本家寄りの政策である、外国製品に50%の高関税をかけるマッキンリー関税法の抱き合わせとして、保護関税主義に反対する西部や南部寄りの、シャーマン銀購入法が成立した。共和党が絶対多数を保つ議会でも一筋縄にいかないほどに、銀自由運動には影響力があった。シャーマン銀購入法は、政府が国内で生産されるほ

ぼ全ての銀を市場価格で買い取り、政府発行の証書で支払うことで、貨幣流通の安定が期待され、貨幣不足でデフレーションに悩む農家や銀生産者を救済できるとした。

B. ハリソン政権の重要政策の成立時期と二つの国際会議の開催時期との関係は、会議に参加した米国代表団の行動を理解するのに重要である。B. ハリソン政権下で発効した一連の重要法案(反トラスト法、マッキンリー関税法、シャーマン銀購入法)は、いずれもワシントン米州国際会議と米州国際通貨会議の間の1890年7月から10月にかけて、上下院とも共和党が過半数を占める第51回議会の会期中に可決された。第51回米国議会は“Billion-dollar Congress”と表現される通り、歳入を軍人の年金や企業への補助金に充てるなど資産家に手厚かったことが不評を買い、またマッキンリー関税法への反発も伴った。そのため、11月に行われた中間選挙で、かろうじて上院は共和党が優勢を保ったものの、下院の過半数を民主党に譲り、また第三党の人民党の躍進が見られた<sup>34</sup>。第52回米国議会で共和党が下院で少数派となった影響は、1890年1月に始まった米州国際通貨会議の進捗を追う上で考慮すべき点であろう。

その後もマルティは銀運動の行方に関心を示し続けた。米州国際通貨会議がこれといった結果を残すことなく終了して8ヶ月経った際に実施された B. ハリソン政権の3年目となる年次教書について書いたマルティは、「ハリソンは銀自由派のクリスプを大統領選のために活気づけようとしているところ<sup>35</sup>だが、銀の自由鑄造について何と言うだろうか。チリとの関係悪化、新しい海軍、互惠条約、マッキンリー法についての意見は？」(1495)と、翌年の大統領選を控えて大統領にどんな思惑があるのか、

<sup>34</sup> 上院に二人の議員を送った。

<sup>35</sup> 民主党の予備選でクリーヴランドの対抗馬に目されていた。

複数の政策に関心を示して分析した。その中で、「望ましい目標は複本位制だ」という大統領の言葉を引用し、金で支払う欧州で、支払いのための金の不足が顕著になるまで、市場に銀を過度に流通させることは控えるよう訴えた姿勢を、銀自由派とは反対の立場にあると捉えた。マッキンリー法に関しては「いくつかの産業でこの先多くの雇用が米国人にもたらされるだろう」という大統領の発言に、シャーマン銀購入法のように自国産業を保護すればいいと皮肉りつつ、「効果が出るまでもう少し待とう」という苦し紛れの大統領のコメントに何ら意見を挟むことなく締めくくる(1495-96)。

ほかにもメキシコに関しては、「メキシコ以外にも」両洋横断鉄道が敷設されるという大統領の発言を敢えて引用し、エクアドルなど米州内のほかの地域でも両洋を繋ぐ鉄道敷設計画が随時進んでいることや、メキシコやカナダを通して「招かれざる中国人が入国する」といった発言を淡々と綴り、「メキシコについては、国境線条約についての特別な一節があった」として、グランデ川とコロラド川の地形変化による国境線の調整を条約に則って進めること。そしてメキシコ側が迅速に作った委員会に倣い米国側も対応することが望まれるという大統領の発言に注目した(1498)。米墨国境問題は、マルティがメキシコ滞在時代から長年注視してきたテーマである。スピーチの2ヶ月前に起きて国際的注目を集めたチリ・バルパライソでの米海兵隊との衝突から発展した米智間の外交問題と並ぶ形でマルティが同報告に収めたことは注目されるが、この年次教書に関するマルティの筆致は淡白であり、この頃のマルティは、執

筆よりも独立運動に活動の中心を移したことがその背後に見える。

### 3. 国際会議に見るメキシコと米国

米国は1889年10月から断続的に半年間続いた第一回米州国際会議と、1891年1月から3ヶ月の会期で行われた米州国際通貨会議を主催した。ラテンアメリカ諸国<sup>36</sup>は近代化の行方を左右する輸出部門の収益性が財政、通貨、為替政策(国際価格)によって影響されるため、関税と銀をめぐる問題が国際会議の場において米国主導で米国の利益優先で進むことは避けたかった。マルティは、「正義がありながらも目先の欲に流されやすい」(775)米国から、「我らのアメリカ」を今こそ守る使命を感じたのであろう。二つのアメリカが対峙する国際会議の場でのメキシコの役割に、マルティは期待する。しかしながら、会議を通してマルティの心はメキシコから次第に遠ざかり、アルゼンチン、チリといった南米の大国に寄り添うようになっていく。それでも個人的にメキシコの有力者と良好な関係を築き、来たる独立戦争でメキシコの支援をおおぐ糸口にする。

本節ではワシントン米州国際会議と米州国際通貨会議のマルティの言論が一貫して米国の姿勢と対峙することに注目し、メキシコの態度に厳しい目を向けたことを確認する。

#### 3-1. ワシントン米州国際会議<sup>37</sup>

1889年10月から翌年4月にかけて、米州18ヶ国の代表がワシントンに集まった<sup>38</sup>。ブレインの肝煎りで始まったこの会議の発端は、1879年にチリ、ボリビア、ペルーとの間で国境

<sup>36</sup> B. ハリソン政権発足と同年の1889年にブラジルは共和制に移行し、米州国際会議にも参加し近隣諸国と足並みを揃えるようになった。マルティがイスマノアメリカと表現している箇所以外は、イスマノ(スペイン)アメリカではなく、これ以降ブラジル、カリブ海諸国も含め、ラテンアメリカと表記する。

<sup>37</sup> International Conference of American States.

<sup>38</sup> 代表団の構成は以下の通り。

Argentina: Roque Sáenz Peña, Manuel Quintana. / Bolivia: Juan F. Velarde. / Brasil: Lafayette Rodrigues Pereira, J. G. do Amaral Valente Salvador de Mendonga. / Colombia: José M. Hurtado, Carlos Martínez Silva, Clímaco Calderón. /

線をめぐって勃発した太平洋戦争に遡る。この米州内の紛争に乗じて欧州列強が干渉してきたことから、米州内の紛争仲裁について話し合うべきだと当時の国務長官ブレインが提唱した。そして、ワシントンに駐在する米州諸国の外交団代表相手に会議の主旨が説明されるまで話は進捗した。そんな最中にガーフィールド米大統領の暗殺事件が発生し、同会議の計画は頓挫する。しかしブレインは政治的な働きかけを続け、クリーヴランド政権下で招待状が米州各国に送られると、1889年、長年ブレインが待ち望んだ会議は、B. ハリソン政権下で日の目を見ることになった。

マルティは1889年9月28日から翌年8月31日まで計11回、アルゼンチンのラ・ナシオン紙及びメキシコのEPL紙に宛てて、同会議の推移を報告している。マルティにとってこの会議は「ブレインの会議」(1312)であり、「もうひとつのアメリカ」が団結して米国に対峙しなければならない重要な機会であった。

9月28日の記事では、ニューヨークで汽船を降りて続々と到着する人々をはじめ、集まった代表団の顔ぶれを紹介している。メキシコ代表マティーアス・ロメーロを「祖国では誰も彼に疑心を抱かず、ワシントンではグラントを鉄道の件で後押しした人物だと皆が彼に好意を抱く」と一目置かれる存在であることが示されている。メキシコの代表団に同行したホセ・リマントウルについても「金持ちの息子だが、父親の財産で放蕩するのではなく能力と威厳を保っている」と描写し、在ニューヨーク領事フ

アン・ナバーロは「国の設立者たちの仲間」で、「先住民出身の紳士」とそれぞれ紹介されている(1303)。しかしこの会議で、マルティはメキシコの姿勢に強い疑問を感じるようになる。

米州諸国が集まって米国主導で国際会議を開くという構想は、マティーアス・ロメーロが自国にフランスが干渉して以来その必要性を感じ、長年根回ししてきたものだった。会議の議題はどれもメキシコに利するものだとロメーロは考えており、特に関税同盟と銀の共通通貨に関しては疑いようがなかった(Marquéz 2019: 93)。同会議をめぐるマルティの言論は、ロメーロとの見解の違いを如実に表す<sup>39</sup>。

会議は冒頭の議長選出の時点から波乱含みの展開となった。ブレインは、開催国を代表する立場として自らが当然議長に選出されるものと考えていたが、チリとアルゼンチンから、彼は正式な米国代表団メンバーではない、と異議が出された。マルティもこの様子を「すでに剣術と諍いと誹謗の幕が下りた。」(1313)と表現し、チリのバラス、アルフォンソ、アルゼンチンのロケ・サエンス＝ペーニャ<sup>40</sup>とマヌエル・キンターナがいかに激しく対ブレイン論戦を展開したかを語る。副議長を選ぶ選挙では、ペルー代表団のフランシスコ・セガーラが第一副議長に、マティーアス・ロメーロが第二副議長にそれぞれ決まった(1352)。ロメーロはこの会議で「慎重さと英語の学識の高さ」が知れ渡っていた。

米国は初日の会合で一旦11月18日まで会議を休会とし、代表団たちを鉄道での視察旅行

Costa Rica: Manuel Aragón. / Chile: Emilio C. Varas, José Alfonso. / Ecuador: José María Plácido Caamaño. / El Salvador: Jacinto Castellanos. / USA: John B. Henderson Cornelius N. Bliss, Clement Studebaker, T. Jefferson Coolidge, William Henry Trescot, Andrew Carnegie, Morris M. Estee, John F. Hanson, Henry G. Davis, Charles R. Flint. (James G. Blaine は議長、William E. Curtis は統括官(executive officer).) / Guatemala: Fernando Cruz. / Haiti: Arthur Laforestrie Hannibal Price. / Honduras: Jerónimo Zelaya. / Mexico: Matías Romero, Enrique A. Mexía. / Nicaragua: Horacio Guzmán. / Paraguay: José S. Decoud. / Peru: Félix C. C. Zagarra. / Uruguay: Alberto Nin. / Venezuela: Nicanor Bolet Peraza, José Andrade, Francisco Antonio Silva.

<sup>39</sup> 米州国際会議にマルティが直接関わることはなかったが、米州大陸通貨会議ではウルグアイ代表団の一員として、ロメーロと直接議論を交わす立場になった。

<sup>40</sup> アルゼンチン代表団のロケ・サエンス＝ペーニャは1890年4月に外務大臣に任命され、その後1910～1914年にアルゼンチン大統領となっている。



に招待した。ボストン、クリーヴランド、フィラデルフィア、西はシカゴにまで至る1ヶ月以上の視察は、米国の近代化の勢いを招待国に見せつける狙いがあった。17ヶ国の招待国のうち、アルゼンチン、チリ、メキシコはこの視察を早々に辞退している。敵対的態度を示したアルゼンチンとチリのことを、ブレイン寄りの新聞ザ・サン紙が「英国の手下かつ道具」と表現したことに対してマルティは、「ここでは英国への嫉妬が渦巻いていて、悪徳なザ・サン紙はブレインの仲間だ」と指摘。英国はアルゼンチン、チリ最大の貿易相手国で、ブレインがこの会議を利用して英国資本を駆逐しようとする目論見にアルゼンチンとチリ両国は予め警戒網を張った、トラ・ナシオン紙で伝えている(1315)。英国資本はニューヨークでも進出が盛んで、この頃次々と米国企業が買収されていた。

同会議の開催期間を通じて、マルティの反米的な言論は先鋭化する。会議期間中の代表団のクリスマス休暇に、マルティは各国代表団を前にイスパノアメリカ文学協会主催の歓迎会の場で「母なるアメリカ」と題した演説をした<sup>41</sup>。同論考でマルティは、リンカーンが生まれた米国がいかに特別であろうと、フアレスのアメリカの方が偉大だと、二つのアメリカを対立させて説く。米国と同じテーブルにつくにあたっては、米国の成り立ちを理解すると同様に、「もう一つのアメリカ」の輝かしい歴史を改めて見つめ直すべきで、物乞いのように富を待つのではなく、自ら作り出し、自由を自らの手で獲得するために、団結すべきだとする内容である。この背景には、当時起こっていたハイチ、ドミニカ共和国への貿易を盾にした米国の武力行使の構えと、メキシコとの貿易摩擦問題が大きく関係している。マルティは10月30日のラ・ナシオン紙へ宛てた記事で詳述している。サンニコラス

半島<sup>42</sup>を譲らないハイチ政府を打倒しようと、反乱軍に武力支援する米国の行動を「犯罪」と表現する。さらに、ハイチに黒人系の元上院議員ダグラスを米公使として送ったところ、黒人系と肩を並べることを嫌う共和党員が戦艦での同行を拒否した問題がスキャンダル化していることに触れ、共和党員の人種差別的態度を批判している。ドミニカ共和国に関しては、「サントドミンゴを併合しようとしたグラント時代に逆戻りしている」と、ドミニカ共和国産の農産品への不平等かつ不合理な課税がルイジアナ州の砂糖産業保護の利権に与すると非難する。また、メキシコに関しては、鉛と銀の合成金属がメキシコから米国に入る際に税金が上乗せされるのは国内の銀産業と共和党との選挙資金をめぐる汚職が絡んでおり、その対抗措置としてメキシコが課税措置を採り貿易摩擦に発展しても、米資本の鉄道会社が同合金の配送を担っている限りは曖昧な態度を取り続けるしかないだろうと、政治の腐敗体質が国際貿易に及ぼす影響を憂慮している(1319)。

このように、米国の南方外交が利権でもって展開される経過を目の当たりにしていたマルティは、国際会議で米国が主導権を握ることに危機感を抱いた。各国代表団を前にメキシコ以南のアメリカの団結を訴えたのは、長年抱いてきた危惧が現実のものとなり、会議で「制度化」されるのを恐れたからであろう。

会議はテーマごとに16の委員会が設けられた。そのうちのひとつ、通貨協定委員会では、7人の委員により、銀貨による米州の共通通貨を採用する通貨協定の可能性が話し合われ、議論の末に、三つの意見書が提出された。ここで米国代表団の間の意見の食い違いが明確に表れた。意見書の一つはメキシコ、ベネズエラ、チリ、ホンジュラス、ボリビアの連名で、銀によ

<sup>41</sup> 1889年12月19日に開催。

<sup>42</sup> イスパニョーラ島北西部に位置し、キューバとハイチを隔てるウィンドワード海峡に向かって突き出た半島。

る共通通貨の設立を推奨し、含有量、価値、金との関係などの詳細は、再びワシントンで話し合うことが提起された。残り二つの意見書は、それぞれ米国のクーリッジとモリス・エスティーによるもので、前者は中米、南米からの銀を米国とメキシコが受け入れ、米国内と同じように銀証書を発行するという内容、後者は共通ルールのもとで各国が銀貨を鑄造するというものだった。結果的に同会議の共通通貨に関する声明は、5ヶ国連名の意見書に近い、共通通貨制度の設立を推奨する文言に留まった(Roubic and Schmidt 1994: 60-6)。

このように、共通通貨に関する米国代表団内の分裂が浮き彫りになる一方で、米国の本来の意図が顕になったのが、ツォルフェライン(Zollverein)と呼ばれるドイツで始まった共通関税制度の米州版の設立だった。マルティは、この関税制度について、会議早々から注目し、米国での報道ぶりを綿密に分析。米墨の国境貿易事情に精通する在マタモロス領事ワナー・ペリン＝サットンの報告書の内容から、実現を危ぶむ見方に傾く有力紙に賛同した(1322-4)。

会議では、ツォルフェラインを非現実的だと捉える空気が早々に流れ、結果的に二つの意見書が提出された。ひとつはブラジル、メキシコ、コロンビア、ベネズエラ、ニカラグア、米国の連名で、関税同盟の前段階として互惠条約の推進を望むというもの。もうひとつのチリとアルゼンチンの連名の意見書は、関税同盟を実現不可能と結論づけた。そしてマルティが会議後に執筆した1890年5月の記事では、「経済問題ではツォルフェラインが議論の的になったが、太陽に向かうアルゼンチンが勝った」(1411)と綴っている。ロメーロも、「米国世

論は未だ、この大陸の兄弟国が相手であっても自由主義的な対外貿易手法を受け入れる準備ができていない」ことを確信した(Marquéz 2019: 96)。

同会議も終わりに近づいた1890年4月、満を持して仲裁についての決議案が検討された。マルティはこれを、「会議は中国製の重箱のようだった。蓋を開けばまた一つ箱が出てきて、取っても取っても箱がある。最後に出てきた宝物、それがまさに仲裁だ」と示す(1400)。

議場には、緊張感がみなぎっていた。マルティは「劇的な一日」を鋭く嗅ぎ分けたのだろう。この時ワシントン D.C. にいた。さらに彼は、メキシコの曖昧な態度の真意も嗅ぎ取った。議場の顔ぶれは、少し「緊張気味」の議長セガーラ(ペルー)、その隣には「二言語を自在に操る」キューバ人のホセ・イグナシオ・ロドリゲス<sup>43</sup>、対面に「けばけばしい口髭をはやし、耳にするスペイン語に甘味をつけるでも氷を入れるでもなく軍人さながらにそのまま英語に訳出する」ファガーソン、「血色のよい」ヘンダーソンほか、米国代表者は初めて全員揃って時間通りに着席していた。

代表団に世界平和同盟<sup>44</sup>の決議案が配られ、副議長のマティーアス・ロメーロが議会を開会した。しかし、多くの席が埋まらずにいた。委員たちが別室で「強力な」追加案を話し合っていたのだった。追加案は、征服国家を非難する主旨で練られていたため、米国代表団はこれに否定的だった。米国のトレスコットは啖呵を切って、小委員会の討議を待つ必要はないと主張したが、アルゼンチン代表団のサエンス・ペーニャに「礼儀正しく」嗜められた。討議を終えた委員会メンバーが入ってきた。ベネズエラのボレ・ペラサ、「大きな口髭の」ポルトガル

<sup>43</sup> 英語と西語を自在に使いこなすので起用された。マルティは教え子だった。

<sup>44</sup> Unión de Paz Universal (UPU)。南北戦争から生まれた平和団体で、紛争は仲裁によって解決できるという信念に基づき、産業界の揉め事のほかにもグラント政権時のドミニカ共和国とキューバへの干渉を非難するなど、政治的な発言も積極的に行った(Scholarly 2005: v)。

人アマラル・バレン、「病気を患った」グアテマラのクルス、「瞳に闘志、頬に貶められた祖国の炎が漲るボリビアの紳士」ベラルデ、コロンビアのウルタード、「仲裁の歯を研ぎ澄ました戦う弁護士」キンターナといった具合に、マルティの筆致には躍動感が漲る(1401)。

アマラルは委員会で討議されたばかりの追加案の読み上げを提案した。トレスコットは立ち上がってこれに抗議するも聞き入れられず、追加案は事務局長によって読み上げられた。マルティは、米国代表団の判事エスティーが所有権に関する専門用語の知識不足を露呈させた場面を冷笑気味に叙述する。『『米国外大陸に、空白地帯(Res Nullius)はない』という文言が読み上げられると、エスティーは振り返って尋ねた『リス何だって?』仲間たちから苦笑がこぼれた』。またマルティは、これを聞くメキシコ代表団の様子を「蒼白で不可解」と表現する(1401)。アルゼンチン代表団のキンターナが自国の立場を表明した。「米州の国際的な権利の前では、米州諸国に大国と小国の違いはない。全ての国が平等に主権を持ち、独立している。全ての国が平等に、思いやりと尊重を得るに値する尊厳を持つ」。その後が続いたメキシコと、議場がメキシコの動向に注目している様子をマルティはこう語る。

「メキシコのことがどれだけ話題に出ていたことか!『メキシコが理解できない!』という声もあれば、『メキシコは全力を尽くしている』という声や、『メキシコは我々よりもよくわかっている』という声もあった。優しく落ち着いて話すメキシコは、椅子から椅子に移動し、声を集め、調べ、皆が話している時に何も言わない。『ロメーロの細かさ』を理解できずにいる者もあれば、こんなことが言われる。『策略が筒抜けだ。藁で覆わなければ』、『でもこの会議でメ

キシコは置いてきぼりにされていないし、敵も作っていない』」(1404)。

そして発言者のロメーロが一条ごとに意見を細かく説明する様子を、「滑らかに読み上げ、その声は純潔さを響かせる」と言うが、そこに潜むものを「あの純粹さの影に何を隠しているのだろうか。戦う意志でも恐怖でもない。仲裁を法と捉えているのだ。注意深く詳細に、法律を語るように仲裁を語る」と見る(1404-5)。

この時メキシコ代表団は、ジレンマに陥っていた。仲裁案の真の目的は、大陸内の紛争仲裁へ米国が関与を可能にすることである。この仲裁メカニズムが一度承認されれば、それがグアテマラとメキシコの国境紛争に適用される可能性が非常に高い。しかし、米墨間の紛争については潜在的に有効かもしれない(Márquez 2019: 98-99)。メキシコが取った曖昧な立場に対して、マルティの筆には苛立ちが読み取れる。「メキシコは仲裁を拒否しているのではない。かといって、メキシコは方針があるのにそれを語らない」、「メキシコは反対しているとも言わないだろうし、はっきりもしないだろう。いいと考える条文もあれば、そうでない条文もあるのだ」、「保留事項を仲裁要件に含めるのはあまり得策ではないとするのは、チリを喜ばせるためだろうか。誰を仲裁者にするかなどの詳細に拘る必要はないと考えるのは、米国を喜ばせるためだろうか」(1405)。

そして仲裁の例外事項として「係争国の名誉と尊厳が直接傷つけられる場合」という文言を入れなければ署名できないとする立場を取りながらも、結局は、仲裁案が「同意の指針を持てば」合意する用意があるというメキシコに、マルティは煮え切らない気持ちを滲ませる(1405)。

ロメーロは同会議で取ったメキシコ代表の立場について、会議後に国内で批判を受け



た。その際、こともあろうか上記のマルティの記事を自身の著作で弁解のために引用している(Márquez 2019: 101)。苦境に立つメキシコの立場をマルティの描写で理解してもらおうという意図だったのか。

同会議では、南米諸国の反米姿勢が明らかになった。マルティはこれに賛同と協調を見せるようになる。そして会議終了後の6月に、在ニューヨーク駐在アルゼンチン領事、翌月同パラグアイ領事に任命され、米国に対して毅然とした態度をとる南米諸国の言論形成にさらに重要な役割を果たすと共に、実際に外交を動かす立場になった。そのような中で、米州国際通貨会議が始まる1891年1月に発表されたのが、『我らのアメリカ』論考であった。

### 3-2. 米州国際通貨会議<sup>45</sup>

米州国際会議で開催が勧告された同会議は、1891年1月7日から3ヶ月の会期で開かれた。その目的は、国際通貨同盟を作り、参加国が共通の国際通貨を鑄造することだった。この会議にマルティは、ウルグアイ外交団の代表として参加した。自らが直接に「我らのアメリカ」の利益のために力を尽くせる場で、公の言動は終始一貫していた。

マルティの共通通貨に反対する立場は、このように表現されている。「銀貨を国際通貨として承認し、その価値を固定させるうえで最大の障壁になっているのが、米国では銀が野放図に生産されるのではないかという懸念であり、合衆国は国内法に則り銀貨の名目価格を自由に決めるのではないかという懸念であるとすれば、このような懸念を増幅させるものは、すべて、銀の値打ちを損なうものである」。「イスパノアメリカの銀は、世界の銀市況に見合って、上昇することもあれば下落もする。イスパノアメリカ諸国は自分達の商品の全量を、独占的と

まではいわないものの、主として欧州に売り、欧州から借款や信用を受けている。われわれが、欧州の通貨制度を混乱させようとする制度に与し、欧州が受け入れるのを拒否するか、受け入れたとしても、切り下げられるのが明らかな通貨を軸にした制度に加わることに、どのような利益があるというのか」(Martí [1967-69] 1975(2) Vol. 6=2005: 354)。

議長国には全会一致でメキシコが選ばれた。定例会と事前折衝の時点ですでに暗雲が立ち込め、議論の余地なく結果がうかがえるような状況にあったものの、米国は「下院の見解を見極めるため」という理由で、討議もそこそこに、2月に休会を提案した。その間、下院で銀の自由鑄造案が採決されることはなく、休会明けの会議において、米国代表団は方針転換を余儀なくされた。

マルティ率いるウルグアイは本会議で、米国及びメキシコと反対の立場を取った。米国が2ヶ月の休会を提案した際、同会議審議が米国議会に左右されることに断固反対し、聖週間明けの1ヶ月後への期間短縮を勝ち取った。また、下院議会の動向が固まった後に再び会議を招集する提案をしたメキシコを強く非難し、会議後にこのように記録している。ここでマルティは名指しをせずともメキシコ代表団の行動を非難している。

「合衆国の説明によれば、国際通貨の創設を妨げているのは、銀貨の自由鑄造法案に米下院が難色を示しているからではなく、海の向こうの強大な世界が金貨と固定相場をもつ銀貨を受け入れることに反対しているためである。しかし、あるイスパノアメリカの国の代表は次のような質問をした。『新しく招集される米下院での審議において、年内にも銀貨の自由鑄造法

<sup>45</sup> International American Monetary Commission.

案が採決されることが考えられるため、会議を、たとえば1892年1月1日まで、つまり、本件に関する米国政府の決定が出るまで、休会にするのがよいのではないかと。(中略)米国の音頭で開かれたこの会議を、主催国の明確な意向に反してまで続けようとする利害関係とは、イスパノアメリカの各国代表にはその気がないのにどこから出てくるのだろうか。(中略)参加国の大多数がイスパノアメリカの国である通貨会議で、イスパノアメリカの代表たちが、ほぼ一様に、実現は不可能だとはっきり表明した計画について協議するために集まった会議を閉会することに異議を唱える利害関係とは、どこから、それも臆面もなく出てきたのだろうか。それは自国の利益のためでないとするれば、どのような利害関係が、代表団のなかに忍び込み、その溢れんばかりの善意を取り込み、己の利益のためとするのだろうか」(Martí [1967-69] 1975(2) Vol. 6=2005: 359-60)。

会議中、メキシコが牽引力を発揮することはなかった。それでもマルティは、この会議を通じてマティーアス・ロメーロと個人的な信頼関係を築いた。その発端は、国務省からマルティのウルグアイ代表としての参加を了承する返事がなかったため、これをロメーロに相談すると、ロメーロは快く仲介を引き受け、翌日には段取りをつけてくれたことだった。マルティはロメーロへの礼状に、「貴方はご存知ないでしょうが、以前から私は愛情と敬意を持って貴方のことを見ていました。その価値観、祖国への想いは私と共通するところがあり、今回私の任務を果たす喜びは、貴方のようなお方を近くで知ることによる部分が大きいことを、信じていただきたく存じます(Franyutti 1993: 91)」と綴り、メキシコ代表団との良好な関係構築への希望を滲

ませている。

同通貨会議は、報告書の起草をマルティが担った。米国の当初の意図は挫かれ、ブラジルを含めたラテンアメリカ諸国が大きなまとまりを見せて米国に対峙することに成功したことをマルティ自らも実感した。これを一つの節目として、マルティは祖国キューバの独立に向けて、本格的に舵を切ることとなる。

## 結び

マルティは、メキシコのポルフィリオ・ディアス政権の誕生を当初受け入れなかったが、ディアスの近代化政策が順調に進み、レルド政権との融和を図ってレルド派を政権内に組み入れたことでマルティとディアス政権の距離は縮み、マルティはディアス政権のメキシコを、期待を込めて見るようになった。

そのため、米国にメキシコ観が正しく伝わっていないことを嘆き、米国で伝えられるメキシコの情報に高い関心を示した。米国の報道にみられるメキシコ蔑視の言論を指弾する姿勢や、メキシコを正しく理解することを主張する姿勢には、メキシコへの深い愛情がうかがえると同時に、後世で開花する、土着性を尊重するモダニズムの要素をこの頃のマルティの言論からも見ることができる。

マルティの滞在した1880年代の米国は、二大政党の与野党が入れ替わる選挙戦の駆け引きが激しく、マルティは、いずれの政党も自党の大統領の意向よりも大資本家寄りの政策や票田のための政治を優先させることを常に疑問視した。B. ハリソン政権の政策に関しては、特に関税政策と銀鑄造の政策にマルティは着目していた。また、南方外交に関しても、ハイチやドミニカ共和国への米国の姿勢に警戒を顕に示した。

そのような中で開かれた米州国際会議で、米国外導で会議が進むことを危惧したマルティ

は、南米諸国の揺るぎない態度に共鳴した。メキシコ代表マティーアス・ロメーロは本会議の副議長に選ばれるなど、会議の参加国の中で指導的な役割を求められた。ところがマルティが望むほどに米国に対して毅然と振る舞うことはなく、メキシコ代表団を描写するマルティの筆致には苛立ちが表れていた。

ラテンアメリカは同会議において、分裂ではなく結束しなければならないと考えていたマルティが、同会議休会中に代表団に向けて行った演説「母なるアメリカ」は、イスパノアメリカ参加諸国に共通する歴史観を説き、団結を期待するものであった。また、「我らのアメリカ」論考は、米州国際会議後、米州国際通貨会議開催直前に発表されたもので、論考の主張はマルティの通貨会議での行動と一致する。

米州国際通貨会議にウルグアイ代表として参加したマルティは、米国の機嫌を窺いながら会議を進めようとするメキシコの曖昧な態度を非難したが、個人的にマティーアス・ロメーロと友情関係を築いた。

この間通して見てみると、メキシコの19世紀後半の米墨関係を語る上での重要人物であるマティーアス・ロメーロを、メキシコ全権大使として1881年にワシントンに赴任してきた当初からマルティは的確に捉えていた。相手を怒らせることなくうまく距離を取りながら関係性を保つロメーロの対米外交は、当時のメキシコに求められた最善策であっただろう。銀の国際通貨化に関する経済的な恩恵を銀産出国メキシコが優先させようとしたのも無理はない。

しかしマルティは、メキシコにも米国に対する毅然とした態度を期待した。この一連の国際会議を含め、1860年代から長年に亘りメキシコの対米交渉を一手に引き受けていたロメーロに言及するマルティの言論には、期待と疑念が混淆していた。また、公に向けた言動は首尾一貫している反面、私信や個人的な親交

関係においては、生きていくための現実的な選択をするマルティの一面もうかがえた。

本稿では1880年代後半から1890年代前半にかけてのメキシコに関するマルティの記事を主な分析対象とした。今後はメキシコ以外のラテンアメリカ諸国に向けたマルティの視点を分析対象にし、マルティの米州諸国観を明らかにしていきたい。



【一次資料・分析対象】（\* 本リストの日付は特定の記載がない限り、記事の掲載日ではなく執筆日を示す。）

- Martí, José Julian, 2003, *En los Estados Unidos: Periodismo de 1881 a 1892*, Madrid: ALLCA.
- 1883: “Cartas de Martí”, *La Nación* (1883/1/19), *ibid.*, #30, pp.213-25.
- 1885: “Cartas de Martí”, *La Nación* (1885/7/6), *ibid.*, #86, pp.498-503.
- 1886a: “Primavera”, *La Nación* (1886/5/2), *ibid.*, #111, pp.618-22.
- 1886b: “Correspondencia particular para El Partido Liberal”, *El Partido Liberal* (1886/6/18), *ibid.*, #115, pp.635-40.
- 1886c: “Carta de Nueva York”, *La República* (1886/6/18), *ibid.*, #125, pp.681-4.
- 1886d: “Correspondencia particular de El Partido Liberal”, *El Partido Liberal* (1886/12/22), *ibid.*, #141, pp.770-3.
- 1887a: Correspondencia particular de El Partido Liberal”, *El Partido Liberal* (1887/1/8), *ibid.*, #142, pp.774-8.
- 1887b: “Correspondencia particular para El Partido Liberal”, *El Partido Liberal* (1887/6/23), *ibid.*, #157, pp.864-8.
- 1888a: “Muerte de Roscoe Conkling”, *La Nación* (1888/4/25), *ibid.*, #193, pp.1038-43.
- 1888b: “La campaña presidencial en los Estados Unidos”, *La Nación* (1888/5/17), *ibid.*, #195, pp.1049-52.
- 1888c: “Curiosidades americanas. Egipto y América. La masonería en América”, *El Economista Americano* (1888/10 [掲載月]), *ibid.*, #210, pp.1112-3.
- 1888d: “¡Elecciones!”, *La Nación* (1888/11/2), *ibid.*, #218, pp.1132-45.
- 1889a: “El Congreso de Washington”, *La Nación* (1889/9/28), *ibid.*, #246, pp.1301-6.
- 1889b: “El Congreso de Washington”, *La Nación* (1889/10/4), *ibid.*, #248, pp.1312-5.
- 1889c: “En los Estados Unidos”, *La Nación* (1889/10/30), *ibid.*, #249, pp.1316-21.
- 1889d: “El proyecto de Zollverein”, *El Partido Liberal* (1889/12/3), *ibid.*, #250, pp.1322-4.
- 1889e: “Congreso Internacional de Washington Su historia, sus elementos y sus tendencias I”, *La Nación* (1889/11/2), *ibid.*, #252, pp.1330-5. = [青木・柳沼編 2005: 291-301].
- 1889f: “Congreso Internacional de Washington Su historia, sus elementos y sus tendencias II”, *La Nación* (1889/11/2), *ibid.*, #253, pp.1336-42. = [青木・柳沼編 2005: 302-317].
- 1889g: “En los Estados Unidos”, *La Nación* (1889/12/6), *ibid.*, #254, pp.1342-8.
- 1889h: “La conferencia americana”, *La Nación* (1889/12/11), *ibid.*, #255, pp.1349-53.
- 1890a: “La conferencia de Washington”, *La Nación* (1890/4/18), *ibid.*, #266, pp.1399-1410.
- 1890b: “Congreso de Washington”, *La Nación* (1890/5/3), *ibid.*, #267, pp.1411-4.
- 1891: “El mensaje del presidente Harrison”, *El Partido Liberal* (1891/12/18), *ibid.*, #287, pp.1495-8.

Martí, José Julian[1963-67]1975(2), *Obras completas* Vol.6, La Habana: Editorial de Ciencias Sociales. pp.157-67. = [青木・柳沼編 2005: 347-362].

——[1963-7]1975(2), *Obras completas* Vol. 20, La Habana: Editorial de Ciencias Sociales.

Martí, José Julian [1985]2009(2), *Obras completas edición crítica* Vol. 2, Centro de Estudios Martianos.

#### 【参考文献】

Department of States, 1886, “Papers Relating to the Foreign Relations of the United States, Transmitted to Congress, With the Annual Message of the President, December 8, 1885.” (Retrieved September 22, 2022, <https://history.state.gov/historicaldocuments/frus1885>).

——1887, “Papers Relating to the Foreign Relations of the United States, Transmitted to Congress, With the Annual Message of the President, December 6, 1886.” Office of the Historian, Washington D.C. (Retrieved September 22, 2022, <https://history.state.gov/historicaldocuments/frus1886>).

——1890, “Papers Relating to the Foreign Relations of the United States, Transmitted to Congress, With the Annual Message of the President, December 3, 1889.” Office of the Historian, Washington D.C. (Retrieved September 18, 2022, <https://history.state.gov/historicaldocuments/frus1889>).

——1891, “Papers Relating to the Foreign Relations of the United States, Transmitted to Congress, With the Annual Message of the President, December 1, 1890.” Office of the Historian, Washington D.C. (Retrieved September 18, 2022, <https://history.state.gov/historicaldocuments/frus1890>).

——1892, “Papers Relating to the Foreign Relations of the United States, Transmitted to Congress, With the Annual Message of the President, December 5, 1891.” Office of the Historian, Washington D.C. (Retrieved September 18, 2022, <https://history.state.gov/historicaldocuments/frus1891>).

——1893, “Papers Relating to the Foreign Relations of the United States, Transmitted to Congress, With the Annual Message of the President, December 5, 1892.” Office of the Historian, Washington D.C. (Retrieved September 18, 2022, <https://history.state.gov/historicaldocuments/frus1892>).

Escalante Gonzalbo, Pablo, 2004, *Nueva historia mínima de México*, Ciudad de México: El Colegio de México. (Elaine Jones and Fionn Petch, trans., 2013, *A New Compact History of Mexico*, Mexico City: El Colegio de México).

Franyutti, Alfonso Herrera, 1993, “José Martí y Matías Romero. La Comisión Monetaria Internacional Americana: anécdotas, cartas y hechos desconocidos.” *Anuario del Centro de Estudios Martianos*, 16, La Habana: Centro de Estudios Martianos, 76-106.

- Hunt Jackson, Helen, 1884, *Ramona*, (José Martí, trans., [1888] Reprinted in 2021, *Ramona*, Mexico: Gobierno del Estado de Baja California.)
- Márquez, Graciela, and Sergio Silva Castañeda, 2019, *Matías Romero and the Craft of Diplomacy: 1837-1898*, Mexico City: Instituto Matías Romero.
- Martí, José Julian, 2003, *En los Estados Unidos: Periodismo de 1881 a 1892*, Madrid: ALLCA/FCE.
- 1963-1967 (1975 (2)), *Obras completas* (en 26 volúmenes), La Habana: Editorial de Ciencias Sociales.
- 1983-2019, *Obras completas edición crítica* (en 29 volúmenes), La Habana: Centro de Estudios Martianos.
- Padrón Iglesias, Wilfredo, 2015, “José Martí y Porfirio Díaz: notas sobre una singular relación.” *Cuadernos Americanos*, 154 (4), La Habana: Centro de Investigaciones sobre América Latina y el Caribe, 67-87.
- Ponce, Maria Eugenia, 2001, *Catálogo de la colección Porfirio Díaz: correspondencia de Carmen Romero Rubio*, Mexico City: Universidad Iberoamericana.
- Riguzzi, Paolo, 1992, “México, Estados Unidos y Gran Bretaña, 1867-1910; una difícil relación triangular.” *Historia Mexicana*, 41 (3), Mexico City: El Colegio de México, 365-436.
- Rojas, Rafael, 1996, “La política mexicana ante la guerra de independencia de Cuba (1895-1898).” *Historia Mexicana*, 45 (4), Mexico City: El Colegio de México, 783-805.
- Roubik, Caroline and Marcela Schmidt, 1994, *Los Orígenes de la Integración Latinoamericana*, México City: Instituto Panamericano de Geografía e historia.
- Scholarly Resources Inc., 2005, *Records of the Universal Peace Union [1846-1866], 1867-1923, 1938*, Woodbridge, CT: Swarthmore College Peace Collection, Scholarly Resources microfilm edition.
- Wells, David A., [1887]2009, *A Study of Mexico*, Charleston: BiblioLife.

- 青木康征・柳沼孝一郎編、2005、『ホセ・マルティ選集Ⅱ——飛翔する思想』日本経済評論社。
- 牛島信明編、1998、『ホセ・マルティ選集Ⅰ——交響する文学』日本経済評論社。
- 川浦昭彦、2014、「クリーブランド大統領による銀購入法撤廃：政策の選択肢と政治的リーダーシップの関係の考察」『同志社政策科学研究』（16-1）同志社大学：61-9。
- 後藤政子編、1999、『ホセ・マルティ選集Ⅲ——共生する革命』日本経済評論社。
- 松枝愛、2021、「マルティの見た米墨関係：1881～1886」、『Cuadrante クアドランテ』（24）東京外国語大学海外事情研究所：323-39。
- 柳原孝敦、2007、『ラテンアメリカ主義のレトリック』エディマン。